

東洋學叢

『法句經』の思想と歴史的意義

伊吹 敦 (1)

Manusmriti 王権論における

第8、9章の意義(上)

沼田 一郎 (99)

カビール『ビージャク』和訳余滴

橋本 泰元 (105)

↑ブラーフマン(パラモン)の知性の30詩節↑

サンスクリット詩論に見られる詩の定義

清水 乞 (124)

↑カーヴェイヤ・ラクシャナ↑

東洋大学文学部紀要第57集

印度哲学科篇

研究室報告

- ① 本年度より、専任教員(講師)として沼田二郎氏を迎えた。沼田氏は、平成十四年度に退任された清水乞教授の後を襲って「サンスクリット文献講読」「インド哲学仏教学演習」などの授業を担当された。
- ② 本年度の本学役職としては、菅沼晃教授が引き続き評議員を担当した(平成十五年十一月まで)。
- ③ 本年度も学科として新入生歓迎行事を充実させることに意を注いだ。特に、ゼミ連絡会議の発案のもと、入学直後の平成十五年四月十三日に行われた新入生歓迎球技大会、「フレッシユマンキャンプ・イン・ワンデイ」では多くの参加者を得て、新入生同士、あるいは新入生と上級生・教員の交流を促すという点で大きな効果をあげることができた。
- ④ 本年度も「ゼミ活性化対策」として国立国会図書館古典籍課の間島由美子女史、ならびにアジア映画評論家で早稲田大学非常勤講師の松岡環女史をお招きして、それぞれ「日本における仏書刊行の歴史」、「インド映画に見るインドの宗教と社会」と題して講演をして頂いた(平成十五年十一月二十七日、十二月五日)。お二方の講演とも専門家ならではの内容で学生たちの反響は大きかった。
- ⑤ 本年度も大学院の研究発表会を前期(七月十日)と後期

(十二月十一日)に開催した。前期の発表者は小嶋孝(M2)、林香奈(M2)、伊東昌彦(M2)、満達(D1)、佐竹正行(D3)、今野道隆(D2)、出野尚紀(D3)の七人、後期の発表者は吉次通泰(M1)、赤坂史人(M2)、アラムラット・スタッス(D1)、出野尚紀(D3)、熊田順正(D3)、三浦宏文(D3)の六人であった。

⑩ 本年度よりティーチング・アシスタントの制度が拡充されたのに伴って、従来の事務助手の制度が廃止された。事務助手として長年にわたって学科のために尽くしてくれた堀内さんと小長谷さんに対して、この場を借りて学科として感謝の意を表したい。

⑪ 本年度のティーチング・アシスタントは、昨年度より継続の大学院後期課程の出野尚紀君と、本年度より新たに加わった後期課程の今野道隆君の二人で担当した。

⑫ 本年度の卒業論文・卒業制作の提出者は、I部が四十一名、II部が十九名であり、大学院の修士論文提出者は四名であった。本年度の優秀論文に対する褒賞は、以下の通りである。田村芳朗奨学基金受賞者―戸次顕彰(I部)、伊東昌彦(大学院)。勸学奨学基金受賞者―畑尾麻由実(I部)、安田舞(I部)、校友会学生研究奨励基金受賞者―小川真弘(I部)、松山直弘(II部)、林香奈(大学院)。

平成十五年度業績（平成十五年一月～十二月）

菅沼 晃

△著書▽

『釈迦の説話に耳を澄ましてみませんか』（単著、河出書房、平成十五年二月五日、新書判、二二七頁）

△論文▽

「第七格の意味と用法—Siddhāntakaumudī Karakaparakarana 訳註（9）」（単著、「東洋学論叢」第二八号）、「東洋大学文学部紀要」第五六集（印度哲学科篇）、平成十五年三月三十日、A5判、一八六～二二四頁）

「アーユルヴェーダの心身観」（単著、「東洋思想の心身観」）
〈「東洋学研究」別冊〉、平成十五年三月三十日、B5判、三四六～三六〇頁）

「仏教に戦争が止められるか」（単著、「大法輪」八月号、平成十五年八月一日、A5判、一四四～一四九頁）

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事／日本宗教学会評議員／日本仏教学会／禅学研究会／日本近代仏教史研究会

研究発表

「アーユルヴェーダの心身観」（東洋学研究所、平成十五年三

月七日、東洋大学）

△調査活動▽

「日本仏教にみる葬制・墓制（インド葬制との比較研究）」（平成十五年度科学研究費補助金〔基盤研究（2）（C）〕による研究「葬制・墓制にみる日本の死生観」、研究分担者〔研究代表者：高城功夫〕）

△教育活動▽

学内担当科目

学部 インド宗教史（朝霞、I部／白山、II部）

インド古典講読①（朝霞、I部）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

大学院 サンスクリット文献研究・印度哲学研究指導Ⅰ（前期）

印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ（後期）
市民大学等

日曜講義「インドの哲学と宗教入門」（平成十五年一月～十

二月、十回、東洋大学）

その他

インド思想研究会顧問（月一回の研究会でRamayana第一篇

第十三章を講読）

△社会活動▽

庭野平和財団評議員／大法輪石原育英会理事／宝積比較宗教・文化研究所顧問／東洋大学校友会会長

講演「生命の尊さを考える」(大法寺彼岸会講演会、平成十五年三月二十一日、東京吉祥寺)

講演「学祖に学ぶ」(東洋大学校友会・浦水会城東支部講演会、平成十五年六月二十一日、東洋大学スカイホール)

講演「ヨーガの彼岸―智慧と霊性」(日本ヨーガ光麗会全国大会、平成十五年九月十三日、宇治市)

講演「狸灯のなぞ―人間とは何か」(東洋大学校友大会、平成十五年十一月一日、東洋大学スカイホール)

講演「釈尊の成道と現代」(神奈川県仏教会成道会講演会、平成十五年十一月十一日、横浜市)

講座「サンスクリットの魅力を探る」(朝日カルチャーセンター新宿、平成十五年一月十四日、二十一日、二十八日、東京)

講座「正法眼蔵随聞記を読む」(朝日カルチャーセンター千葉、平成十五年一月〜十二月、全十二回、千葉市)

講座「サンスクリット入門」(朝日カルチャーセンター新宿、平成十五年四月〜七月、全十七回、東京)

講座「維摩経を読む」(清風仏教文化講座、平成十五年四月〜九月、全六回、東京・全生庵)

講座「サンスクリット講読」(朝日カルチャーセンター新宿、平成十五年十月〜十二月、全十二回、東京)

△大学・学部の管理・運営▽

学校法人東洋大学評議員(平成十五年十一月まで) / 東洋学研究

所研究員

森 章司

△論文▽

「書簡に見る親鸞と慈信房善鸞」(单著、「東洋学論叢」第二八号) (東洋大学文学部紀要「第五六集(印度哲学科篇)」、平成十五年三月三十日、A5判、二七〜七三頁)

「プロジェクト『原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究』中間報告」(单著、「藝林」第五二巻第一号、藝林会、平成十五年四月三〇日、A5判、一三三〜一五〇頁)

「原始仏教聖典におけるバラモン修行者」*Śramaṇa* (螺髻梵志) と *Vānaprastha* (林住者)」(单著、「中央学術研究所紀要モノグラフ篇」第七号) (原始仏教聖典資料による釈尊伝の研究」

七)、中央学術研究所、平成十五年十一月十三日、A4判、一〜一七頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事 / 地域文化学会理事 / 日本宗教学会 / 日本仏教学会 / 比較思想学会 / 仏教思想学会

△調査活動▽

「日本仏教にみる葬制・墓制」(戒律・教団組織にみる葬制・墓制) (平成十五年度科学研究費補助金(基盤研究(2))(C)による研究「葬制・墓制にみる日本の死生観」、研究分担者

(研究代表者:高城功夫)

△教育活動▽

学内担当科目

学部 仏教学概論（朝霞、Ⅰ部 白山、Ⅱ部）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

アビダルマ哲学（白山、Ⅱ部）

大学院 初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（前期）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ（後期）

△社会活動▽

財団法人庭野平和財団評議員／中央学術研究所講師

講演「釈尊は仏教の開祖か」（東洋大学哲学堂祭、平成十五年

十一月一日、東京・哲学堂公園）

講演「釈尊はどのような一年を過ごされていたか」（中央学術

研究所、平成十五年十一月三日、東京・佼成図書館）

△大学・学部の管理・運営▽

東洋学研究所研究員

川崎信定

△論文▽

「チベット語訳仏典成立過程の考察——『中観心論』第九章・第

十章梵本・藏訳テキスト对照研究」（单著、「東洋学論叢」第

二八号）、「東洋大学文学部紀要」第五六集（印度哲学科篇）、

平成十五年三月三十日、A5判、一七三—一八四頁）

「バヴィヤの自然観」（单著、「日本佛教学會年報」第六八号、

平成十五年五月二十五日、A5判、一五—三〇頁）

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本西蔵学会委員／仏教思想学会理事／日本宗教学会理事／

日本仏教学会理事／比較思想学会評議員／日本印度学仏教学

会評議員／財団法人東方学会評議員／真言宗豊山派教学審議

会委員

△調査活動▽

「日本仏教にみる葬制・墓制（チベット仏教との比較研究）」

（平成十五年度科学研究費補助金〔基盤研究（2）（C）〕によ

る研究「葬制・墓制にみる日本の死生観」、研究分担者〔研究

代表者：高城功夫〕）

△教育活動▽

学内担当科目

学部 宗教学概論（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅱ（白山、乗入れ）

チベット文献講読（白山、乗入れ）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

仏教と社会（白山、乗入れ、専任教員と外部講師の

リレー講義のコーディネーション担当）

大学院 仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ（前期）

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ（後期）

学外担当科目

インド思想史（早稲田大学文学部）

東洋哲学特殊問題①（早稲田大学院文学研究科）

総合文化プログラム（文化情報科学群）（放送大学大学院）

△社会活動▽

財団法人東方研究会理事、東洋学報（東洋文庫）編集委員、財

団法人東洋文庫兼任研究員、財団法人仏教交流センター評議員

、東京大学仏教青年会評議員

△大学・学部の管理・運営▽

（財）井上円了記念学術研究センター運営委員、東洋学研究所

研究員

竹村牧男

△著書▽

『般若心経を読みとく―仏教入門の第一歩』（単著、大東出版社、平成十五年七月三十日、四六判、九〇―二七四頁）

『金剛仙論 上』（共著、新国訳大藏経・釈経論部一一上、大蔵出版、平成十五年八月十日、A5判、三三四頁〈全頁共著〉）

△論文▽

『西田幾多郎と真宗』（単著、「東洋学論叢」第二八号）、「東洋大
学文学部紀要」第五六集（印度哲学科篇）、平成十五年三月
三十日、A5判、七四―九四頁）

『禪と浄土―鈴木大拙の仏教観に学ぶ』（単著、「宗教学会報」

第一二号、大谷大学宗教学会、平成十五年三月十五日、A5

判、二五―六四頁）

『晩年の道元の坐禅観』（単著、「禅研究所紀要」第三一号、愛
知学院大学禅研究所、平成十五年三月三十一日、A5判、一
三―三〇頁）

『鈴木禅学への二視点―個と超個の思想をめぐる』（単著、

「財団法人松ヶ岡文庫研究年報」第一七号、平成十五年三月

二十五日、A5判、六三―八四頁）

『仏教―その読みかえの精神史』（単著、「國文學」五月号、平
成十五年五月十日、A5判、二四―三〇頁）

『現代社会と宗教の役割』（単著、「宗務時報」第一〇八号、文

化庁文化部宗務課、平成十五年八月（発行日不明）、A5判、
二二―四四頁）

『寸心と大拙の世界的意義について』（単著、「大乘禅」十月号、
平成十五年十月一日、A5判、三―二九頁）

△書評▽

『ベルナル・フランク著（仏蘭久淳子訳）『日本仏教曼荼羅』
』（単著、「宗教研究」第三三七号〈第七七卷第二輯〉、平成十
五年九月三十日、A5判、二五―二五七頁）

△解説▽

『秋月龍珉「二日一禅」解説』（単著、講談社学術文庫、平成十
五年五月十日、文庫判、三六三―三六九頁）

△小論▽

『良寛のことば』『良寛・教えの広がり』（単著、『週刊朝日百科

仏教を歩く No.7 良寛』朝日新聞社、平成十五年十一月三〇日、九頁・一〇～一三頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会理事 / 仏教思想学会理事 / 日本宗教学会評議員・『宗教研究』編集委員 比較思想学会理事 / 東方学会

研究発表

「釈迦について」(シンポジウム―東洋大学・その理念と未来・第一部「東洋大学と四聖―その基盤を考える」、平成十五年四月十九日、東洋大学・井上円了ホール)

「大拙と西田―真宗をめぐる」(親鸞聖人御誕生会記念講演、平成十五年五月三十日、大谷大学講堂)

「学術研究における『東洋大学らしさ』―大学アイデンティティと研究戦略」(東洋大学学術研究推進センター・新研究所体制発足記念シンポジウムと特別講演「新たな知の構築をめざして」、シンポジウム「社会にひらく知 東洋大学」・発題1、平成十五年五月三十一日、東洋大学・井上円了ホール)

△教育活動▽

学内担当科目

学部 日本仏教史(朝霞、I部 / 白山、II部)

インド哲学仏教学演習(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

大学院 日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ(前期)

仏教学特殊研究Ⅳ・仏教学研究指導Ⅲ(後期)

学外担当科目

総合科目「生と死を見つめて―死生学入門」中、「仏教における死生観」を担当(金沢大学、平成十五年五月十九日・二十六日)

市民大学等

東京大学仏教青年会「漢文仏典講読会」(毎月二回(第一・第三木曜日)、本郷・東京大学仏教青年会)

万年山青松寺仏教文化講座「『正法眼蔵』に学ぶ」(平成十五年六月、毎月一回、第四水曜日、芝・青松寺)

△社会活動▽

講演「如来蔵思想について」(成田山仏教文化講座、平成十五年四月十二日、成田山新勝寺)

講演「華嚴経の宇宙」(築地本願寺仏教文化講座、平成十五年七月二十六日、本願寺築地別院)

講演「日本文化の根底にあるものⅠ・Ⅱ」(市川学園土曜特別講座、平成十五年十一月八日・二十二日、千葉県・市川学園)

△大学・学部管理・運営▽

大学院仏教学専攻主任 / 学術研究推進センター副所長 / 東洋学研究所研究員

橋本泰元

△翻訳▽

「クリスチャン・ブイ著『ナータ派ヨーガ行者と諸ウパニシャツド』―抄訳―」(単著、「東洋思想の心身観」〔東洋学研究〕別冊)、平成十五年三月三十日、B5判、二六一―二九六頁

「カビール『ビージャク』和訳余滴―智慧の34―」(単著、「東洋学論叢」第二八号〔東洋大学文学部紀要〕第五六集〔印度哲学科篇〕、平成十五年三月三十日、A5判、一六六―一七二頁)

△学会活動▽

所屬学会ならびに役職

日本印度学仏教学会評議員 / 日本南アジア学会紀要編集委員
日本宗教学会 / 日本仏教学会

△調査活動▽

「日本仏教にみる葬制・墓制(ヒンドゥー教と日本仏教における葬制の比較考察)」(平成十五年度科学研究費補助金〔基盤研究(2)(C)〕による研究「葬制・墓制にみる日本の死生観」、研究分担者〔研究代表者・高城功夫〕)

△教育活動▽

学内担当科目

学部 / ヒンドゥー教概説(朝霞、I部 / 白山、II部)

インド哲学仏教学演習(朝霞、I部)

インド哲学仏教学演習(白山、乗入れ)

ヒンディー文献講読(白山、乗入れ)

総合C(朝霞、I部、通年の三分の一学期を担当)
大学院 / インド哲学研究II(中世インド思想研究)(前期)

インド哲学研究指導II(前期・後期)

学外担当科目

ヒンディー語I(春学期)・II(秋学期)(大正大学)

インド哲学仏教学特殊講義(夏学期)(東京大学)

中世ヒンディー宗教文学研究(二学期)(東京外国語大学)

△大学・学部管理・運営▽

印度哲学科第一部主任 / 文学部内資格審査委員会委員 / 文学部
内外国語委員会委員 / 東洋学研究所研究員

渡辺章悟

△著書▽

『漢梵 法華経索引 (Chinese Sanskrit Index to the Sād-dhamapāṇḍarīkastrā)』(共著、靈友会、平成十五年二月二十日、B5判、一―一〇八頁〔全頁共著〕)

△論文▽

「悟りへの一瞬の智慧」(単著、「仏教の修行法―阿部慈園博士追悼論文集」春秋社、平成十五年一月二十四日、一五三―一七五頁)

『「八千頌般若」の一切智-sarvajña, sarvajñatva, sarvajñatā』(単著、「東洋学論叢」第二八号〔東洋大学文学部紀要〕第五六集)、平成十五年三月三十日、A5判、一三六―一六五頁

「金剛般若経」に見られる色身・法身の偈頌」（单著、「東洋思想の心身観」〈「東洋学研究」別冊〉、平成十五年三月三十日、B5判、三一九～三四四頁）

「チベット語訳『金剛般若経』シエルカル写本の特徴」（单著、「印度学仏教学研究」第五二巻一号、平成十五年十二月二十日、A5判、四二九～四三六頁）

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会幹事・評議員／日本佛教学会／日本宗教学会／北海道印度哲学仏教学会／仏教思想学会／日本西藏学会／国際仏教学会（IABS）

研究発表

「チベット語訳『金剛般若経』シエルカル写本の特徴」（日本印度学仏教学会第五十四回学術大会、平成十五年九月六日、佛敎大学）

△調査活動▽

「パリ国立図書館所蔵般若経文献の研究」（平成十四年度東洋大 学海外研究費による研究、パリの国立図書館にて写本を实地に調査、平成十五年九月十日～十九日）

「日本仏教にみる葬制（冥界信仰）」（平成十五年度科学研究費補助金（基盤研究（2）（C））による研究「葬制・墓制にみる日本の死生観」、研究分担者〈研究代表者：高城功夫〉、淡路島を中心に十三仏霊場を調査、平成十五年十二月十二日）

十四日）

△教育活動▽

学内担当科目

学部 インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

仏教思想論Ⅰ（白山、乗入れ）

インド仏教史（朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部）

総合D（朝霞、Ⅰ部、三回の講義を担当）

総合F（白山、Ⅱ部、通年の三分の一学期を担当）

大学院 大乘仏教研究Ⅱ（前期）

学外担当科目

近現代仏教研究（国際仏教学大学院大学）

△社会活動▽

財団法人仏教伝道協会英訳大蔵経編集委員会委員／同協会仏教

聖典編集委員会委員／財団法人東方研究会研究員

講演「般若について」（浄土真宗大谷派真浄寺定例講演会、平

成十五年七月三十日、文京区向丘・真浄寺）

△大学・学部管理・運営活動▽

印度哲学科第Ⅱ部主任／文学部内資格審査委員会委員／文学部内カリキュラム検討委員会委員／東洋学研究所研究所員

伊吹 敦

△論文▽

「『念佛鏡』に見る八世紀後半の禪の動向」（单著、「東洋学論叢」

第二八号〈東洋大学文学部紀要〉第五六集、平成十五年三月三十日、A5判、九五〜一二二頁

「金剛藏菩薩撰『金剛般若經註』校訂テキスト」(单著、「東洋学研究」第四〇号、平成十五年三月三十日、B5判、二三三〜二六八頁)

「白隠の心身観」(单著、「東洋思想の心身観」〈東洋学研究〉別冊)、平成十五年三月三十日、B5判、二二一〜二二二頁)

「早期禪宗史研究之回顧和展望」(单著、王迪訳、吳言生主編「中國禪學」第二号、中華書局〈北京〉、平成十五年五月〈発行日不明〉、B5判、二七八〜二八九頁)

「關於『曹溪大師傳』的編輯過程及其意義」(单著、王迪訳、「曹溪大師傳」の成立をめぐる)〈東洋の思想と宗教〉第十五号、平成十年三月〉の中国語訳、同上、二七八〜二八九頁)

「『心王經』の諸本について」(单著、「印度学仏教学研究」第五二卷一号、平成十五年十二月二十日、A5判、一八〇〜一八七頁)

「境野黄洋と仏教史学の形成(上)」(单著、境野黄洋著作集第一卷「中国仏教Ⅰ 支那仏教精史(上)」解説、うしお書店、平成十五年十二月八日、A5判、一〜三七頁)

△補遺▽

「敦煌本《壇經》是否爲傳授本」(单著、「慧能與嶺南文化」國際學術研討會論文集)《學術研究》雜誌社〈広州〉、平成九年

五月〈発行日不明〉、A5判、三〇五〜三二二頁)

「禪宗の出現與社會反應」《淨土慈悲集》所見北宗禪活動」(单著、斎藤智寛訳、「禪宗の登場と社會的反應」『淨土慈悲集』に見る北宗禪の活動とその反應)〈東洋學論叢〉第二十五号、平成十二年三月〉の中国語訳、「佛学研究」二〇〇二總一期、

中国佛教文化研究所〈北京〉、平成十三年〈発行日不明〉、B5判、九七〜一〇八頁)

「關於禪宗的《法句經疏》」(单著、「戒幢佛學」第二号、戒幢佛學研究所編、岳麓書社〈長沙〉、平成十四年十二月〈発行日不明〉、B5判、一八九〜一九九頁)

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会コンピュータ利用委員会委員／仏教思想学会／早稲田大学東洋哲学会／日本仏教学会／財団法人東方研究発表会

「『心王經』の諸本について」(日本印度学仏教学会第五十四回學術大会、平成十五年九月七日、佛敎大学)

△教育活動▽

学内担当科目

学 部 中国仏教史(朝霞、Ⅰ部／白山、Ⅱ部)
禅の思想と文化(白山、乗入れ)
東洋思想(白山、Ⅱ部)

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

△社会活動▽

財団法人東方研究会兼任研究員

△大学・学部 of 管理・運営▽

文学部内予算委員／文学部内入試委員会委員／文学部リーフレット編集委員／東洋学研究所研究員

沼田 一郎

△学会活動▽

所属学会ならびに役職

日本印度学仏教学会／日本南アジア学会／日本仏教学会／北海道印度哲学仏教学会

研究発表

研究発表

「王の神格化と日常の職務」（北海道印度哲学仏教学会第十八回学術大会、平成十五年七月二十六日、帯広大谷短期大学）

「Dharma 文献司法篇における〈雑則〉規定」（日本印度学仏教学会第五十四回学術大会、平成十五年九月六日、佛敎大学）

「家長の務めと夫婦―法典に見る家族」（日本仏教学会学術大会、平成十五年九月十三日、大正大学）

△教育活動▽

学内担当科目

学 部

サンスクリット文献講読①・②（朝霞）

インド哲学仏教学演習（白山、乗入れ）

インド文化論Ⅰ（白山、乗入れ）

インド古典哲学（白山、Ⅱ部）

△大学・学部 of 管理・運営▽

文学部内情報機器運営委員会委員／印度哲学科図書館図書選書担当者／東洋学研究所研究員

平成十五年度演習ゼミ活動報告

竹村牧男

インド哲学仏教学演習① 朝霞

① テーマ「鎌倉旧仏教の研究」

② メンバー 太田将史(幹事)・村上舞(副幹事)他、二年生十三名

③ 活動報告

本年度は、岩波書店の日本思想大系の『鎌倉旧仏教』の中から、凝然の『華嚴法界義鏡』を読み、華嚴思想の特質や仏教全体の概要と華嚴仏教の位置等について学ぶこととした。学生には十分な予習を課し、一行ずつ順にあてて発表してもらった。運営した。『華嚴法界義鏡』は、華嚴思想の入門書として名高いが、学部二年生が読むには、だいぶむずかしいものである。下巻の方がやや基本的で分かりやすい内容であるため、下巻から講読しはじめたが、学生は最初だいぶとまどったようである。しかしともかく講読を続けていくうちに、後期も半ばになるとかなり内容の理解が進み、予習も適切になされるようになってきた。いきなり高度な世界に突入した感もあったと思うが、かえって仏教教理全体の見通しもある程度形成されたようで、今後の仏教の勉強に資するものとなったと思われる。

コンパは、四月と翌年一月に行い、ゼミ合宿は白山のそれと合

同としたが、このゼミからの参加者は二名にとどまり、残念であった。白山ではみずから研究し発表する形式にしているので、そのことにしりごみしたのかもしれない。この問題は、来年度以降の改善すべき課題かと思われる。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習② 朝霞

① テーマ「ヒンドゥー教思想入門」

② メンバー 三浦昇大(幹事)他 二年生十名

③ 活動報告

昨年度と同様に、ヒンドゥー教の中心思想であるバクテイ(信愛・帰依)思想を、『バガヴァッド・ギーター』のなかに見ていくことを課題とした。

本年度も、初期の動機付けとしてヒンドゥー教を概説する英語版ヴィデオを見せ、途中、担当教員が不足と思われる個所で文化的な解説を加えた。さらに昨年度が日印国交自立五十周年記念の年で、インド文化紹介のテレビ番組が多く放映されたので、その録画ヴィデオを数本を見てもらい、インド文化への関心を高めようことに努めた。

前期後半から、『ギーター』の概説と文法的輪説に入った。初めに『ギーター』の使用テキスト(ヒンディー語注付き流布本)と和訳・参考書などの紹介・解説を行なった。次いで、文法注の解説書のある第一章を除き、昨年度に終了しなかった第二章後半

から文法的読解の作業を輪読形式で開始した。本年度は熱心な受講者人がおり、第三章中ごろまで進めることができた。

前期末コンパは、近隣のインド料理店で行い、インド料理にも関心を持ってもらうことができた。

沼田一郎

インド哲学仏教学演習① 白山(乗り入れ)

- ① テーマ「インド古代社会研究の諸問題」
- ② メンバー 堀内藍子(幹事) 他、四年生一名、三年生十名
- ③ 活動報告

一年目の活動は以下の通り。年度当初は担当教員による概説的な講義形式。参考文献や資料の邦訳その他を紹介しながら、標記のテーマを扱う際のアウトラインを押さえることにした。シラバスではその後は各自の研究発表形式とすることを謳ったが、概説を超える関心、知識が充分ではないと思われたので、A. L. Basham: *The Wonder that was India* の「社会」を扱った章を輪読することとした。担当者には英文を正確に読むことと、そこに指示された一次資料をできるだけトレースすることを要求し、その報告に基づく討論を行った。メンバーの興味関心が必ずしも一致しないこともあり、毎回充分な内容になったとは言い難いが、回を重ねるにつれて積極的な姿勢が見られたと言えるだろう。

夏休みには「自由研究」を課し、合宿でその成果を報告した。後期はその継続とし、各自の関心に基づいて Basham の著書から

報告、討論を行うこととした。前期途中から四年生が一名参加し、卒業研究の実際を目にして三年生にはよい刺激となったようである。

本ゼミは今年度から開始したばかりであり、直ちには方向が定まらなかった憾み(主として教員側の不手際による)はある。しかし、比較的少人数であったこともあり、メンバー相互のコミュニケーションはよくはかられ、「風通し」のよいゼミ活動であったと思われる。

菅沼 晃

インド哲学仏教学演習② 白山(乗り入れ)

- ① テーマ「インド思想の人間観」
- ② メンバー 岩井寿江(幹事)、畑尾麻由美・布川理恵子(副幹事)、小田幸由子・倉島直美(記録係) 他、四年生十八名、三年生十七名、二年生二名、大学院二名
- ③ 活動報告

1. 本年度は、仏教班による Mahāvagga, Mahākandhaka, Nānasiddhi-jātaka, Jātaka-nīṭānakathā, Saketa-jātaka の一部の講読・研究発表、アーユルヴェエータ班による Aṣṭāṅghrdaya, Sūtrasthana の最初の部分の講読・研究・発表、哲学班による Saṅkara, Ārabodha (1-15) の講読・発表を行った。叙事詩・文学班の発表は時間の関係でカットせざるを得なかったのは残念である。今年度は出席も比較的良好であり、とくにアーユルヴェエータ

研究が定着した感があり、各自の関心（健康、肥満、心理など）に応じて、原典 (Aṣṭāṅga-hrdaya, Aṣṭāṅga-saṃgraha, Caraka-saṃhitā) の一章を和訳して発表するという研究方法がとられるようになった。これは卒業論文の作成にも直接つながる方法であり、大きな進歩であると思われる。

2. 平成十五年八月一日～三日、白馬セミナーハウスにて、インド思想研究会、大学院ゼミとの合同の夏期合宿研修を行った。四年生は卒業論の中間発表を行い、ゼミはアーユルヴェーダ班の発表、大学院生は学会形式での研究発表を行った。参加者はOG・OBを含めて約五十名、きわめて充実した合宿であった。

3. 本年度もアーユルヴェーダ班の発表が目立った。来年度でこのゼミは終わるが、アーユルヴェーダ研究は、東洋大学印度哲学科の特色の一つを形成しようものと考えられるので、何かの形で研究を継続することが望まれる。

橋本泰元

インド哲学仏教学演習③ 白山（乗り入れ）

① テーマ「中世ヒンドゥー教思想研究」

② メンバー 桐田丈弘（幹事）他、四年生十一名、三年生十名、二年生四名

③ 活動報告

昨年度と同様に、『バーガヴァタ・プラーナ』において完成された民衆的なバクティ思想と、北インドにおける中・近世の民衆

的なバクティ思想運動の展開を中心課題とした。

初めに、担当教員が新入ゼミ生を中心に使用テキスト（流布本で第十巻「ラーサの五章」と英訳、和訳、研究書およびヒンドゥー教関係の事典を中心とした参考書の紹介・解説を行なった。このテキストの輪読は、語学力増進を狙いおもに三年生を中心に戻一頃の割合で行なった。

この作業と併せて、原典読解に関心の薄いゼミ生のために、ヒンドゥー教女神に関する名著 David Kinsley, *Hindu Goddesses, Delhi: Motilal Banarsidass, 1987* の「ラクシュミー」章と「パールヴァティ」章の輪読も同時進行した。インド思想・文化に関する卒論・卒業制作で邦語資料にはかり頼る安易な作業を避け、外国語文献を利用して欲しいと考えるからである。

本年度は、八月三日～九月二日に豊丘セミナーハウスで、インド文化研究会との合同で合宿研修を行い、四年生の卒業論中間発表と、三年生によるゼミ教材の輪読を中心に活動し、研究会は合宿中日の休憩時間帯を利用して、昨年度ヒンディー語映画のヒット作を鑑賞し、全体として充実した合宿であった。

渡辺章悟

インド哲学仏教学演習④ 白山（乗り入れ）

① テーマ「大乘仏教の研究」

② メンバー 小長谷将人（前期幹事）・中村充弘（後期幹事）他、四年生七名、三年生五名、二年生二名

③ 活動報告

今年のゼミは特定のテクストを講読するという形式はとらず、ゼミの構成員が自主的に研究テーマを選び、それを課題として各自がレポートするという形式をとった。

具体的には、最初にゼミの共通テーマを「仏教の生命観」と決定し、これに「個人テーマ」を組み合わせて、毎回発表してもらうという形態をとった。毎回の発表者は必ずハンドアウトを用意し、質問に備えることと、ゼミ参加者は必ず全員が一回以上質問することを義務づけた。

司会も原則的にはゼミ長が行ない、担当教員は最後に纏めるときにのみ指導するにとどめた。最初はぎこちない運営であったが、次第に慣れてきて、毎回の発表は充実し、時間が足りなくなるこゝとがしばしばであった。ただし、発表者の出来如何によって充実度が極端に異なるため、運営に苦労したこともあった。この感想は参加者共通の意識ではなかったかと思う。

夏休みには群馬の禅寺で二泊三日の合宿を行なった。ゼミ員ほぼ全員が出席し、個人テーマを中心とする研究発表を行った。また、サンスクリットによる『般若心経』の講読と読誦、漢訳経典の読誦に加え、毎朝の参禅、食事の作法など、大学では味わえない禅寺ならではの貴重な体験を持つことができた。

今年度の発表は、ゼミ生の興味が絞りきれず、ややゼミ全体の論議が纏まりに欠けたこと、前期に比べ、後期はゼミを欠席する者が目立ったこと、それに伴い、あらかじめ予定されていたゼミ

の運営に支障が出たことが本年度の問題点である。

森 章司

インド哲学仏教学演習⑤ 白山(乗り入れ)

- ① テーマ「原始仏教研究」
 - ② メンバー 戸次顕彰(前期幹事)・安田卓史(後期幹事) 他、四年生五名、三年生七名、二年生二名、大学院五名
- ### ③ 活動報告

年度初めの六回は大学院生の協力も得ながら、原始仏教概説、原始仏教資料概説、卒業論文(制作)の書き方、電子資料の使い方などを講義し、図書館見学を行った。その後研究活動に入った。研究は共同研究と個人研究の二本立てで進めた。

共同研究の今年度のテーマは学生と相談したうえで「原始仏教教団と社会」とした。まず「南伝大蔵経」の第一巻から第四巻(律蔵)までをゼミ員全員が分担してカードをとり、これを集めて次の九つのテーマに分類した。すなわち「仏教教団と王権」「仏教の戦争に対する態度」「仏教のカースト観」「出家者は在家者にどのように接したか」「在家者は出家者にどのように接したか」「出家者は異性とどのように接したか」「仏教の職業観・犯罪者観」「仏教の他教に対する態度」「仏教教団の金銭処理・物品処理方法」である。これらを配当された担当者が分析し、考察して発表するという形式で進めた。本ゼミにはタイからの留学生が五名含まれており、全員が憎ないしはその経験者であり、彼らにとつ

でも刺激的なテーマとなって、活発な討議が行われた。

個人研究は四年生の卒業論文(制作)「テーマに関する研究、三年生以下での卒業論文(制作)」を視野に入れた自由研究とした。原則として月の第一週のかかりの時間はこの指導に充て、その発表は夏のゼミ合宿において行った。ただし止むを得ない事情のある合宿欠席者については夏休み後の授業時間に行った。

年度末には『森ゼミ紀要』第十二号を刊行し、共同研究の成果と卒業論文(制作)の要旨、優秀論文を掲載する予定である。

ゼミのホームページ (<http://www2.toyo.ac.jp/~morimori/>) へのアクセスは、この一年間で約四五〇〇件となっている。ただしその技能のある学生が卒業して管理者不在の状態となっており、後継者の養成に迫られている。

伊吹 敦

インド哲学仏教学演習⑥ 白山(乗り入れ)

① テーマ「禅思想研究」

② メンバー 武内賢一郎(幹事)他、四年生四名、三年生八名、二年生二名

本ゼミは、中国仏教の中でも、最も中国的な性格を多分に持つ「禅」を中心に、その思想の特質や成立、変化をたどってゆくことを目的とするものである。

昨年度末の合宿で行った学生との話し合いに基づいて、今年度も去年に引き続いて『臨濟録』の講読を行った。その方法も、昨

年と同様、岩波文庫本をテキストとし、あらかじめ決めておいた担当者にレジメを作ってきてもらい、それを基礎に全員で討論を行なうという形式を採った。このテキストには訓読と翻訳が附されているので、漢文読解の訓練という点では十分ではなかったが、出席者の漢文の素養を考えれば、致し方ない点もあったように思われる。

今年度の出席率も昨年に負けないくらい高く、しかも初めて参加した下級生の中にも自発的に発言するものが散見されたことは、今後の運営を考えると非常に好ましいことであつたと思う。課外活動として行なつた鎌倉への小旅行(夏季)も、多くの参加者を得て非常に楽しい時を過ごすことができたが、宿泊施設の設備の問題もあつて、必ずしも勉強中心のものとはならなかつたのは遺憾である。

ゼミ活動のもう一つの柱である卒論指導については、例年通り、授業中での発表はなるべく差し控え、研究室での個別指導で対応しようとなつたが、学生の卒論への取り組みの遅さを思うと、卒論に対する意識を高める工夫も必要であつたかも知れない。

竹村牧男

インド哲学仏教学演習⑦ 白山(乗り入れ)

① テーマ「鎌倉仏教の人間観」

② メンバー 元木裕(幹事)、鈴木勘太・加藤悦子(副幹事)他、四年生十三名、三年生八名、二年生四名

③ 活動報告

本年度は、鎌倉仏教の人間観をテーマに、学生の研究発表により運営した。鎌倉仏教といえは、ともすれば新仏教に目が行きがちであるが、学生が選択したテーマの中には、法然・親鸞・道元・日蓮等だけでなく、明恵・凝然・忍性らもとりあげられ、多彩な方面からその時代の仏教を照射することができた。やはり前期では学生の調査等が十分でなく、また人間観というテーマも理解がゆきわたらなかつた面が見られたが、後期に入つて二度目の発表になると、かなりよく研究した発表が見られるようになり、発表テーマに関する問題意識も明確になってきた。この経験が、卒論のより充実した執筆につながればと期待している。発表に対するデイスカッションは、やや特定の学生に傾くようで、今後ゼミ全体によるいっそう活発な討論を期待したい。

四年生は、卒論の中間発表としたが、発表時期が前期に集中して、卒論を実際に書くにあつての有益な助言や指導を行うことはむずかしかつた。この辺は、次年度のゼミ運営の課題である。四月・十二月のコンパのほか、夏には伊豆・稲取のゼミナーハウスにおいて、二泊三日のゼミ合宿を行った。往きには、最乗寺を訪問、同寺の僧の解説を受けながら拝観した。宿舎では、学生の勉強意欲が高く、二日にわたつて研究発表を熱心に行ひ、遊びの要素は夜の花火大会くらいであつた。研究発表はこのときにかぎり自由としたため、江戸期の良寛にかかわる発表等、多彩なものとなつた。

三日目の復路では、途中、浄蓮の滝によるなどして帰宅に向かつた。

川崎信定

インド哲学仏教学演習⑧ 白山(乗り入れ)

① テーマ「中観・唯識思想基礎的原文の講読研究」『唯識二十論』

② メンバー 桜井宣明(幹事)、小川真弘・金丸春樹(副幹事) 他、四年生六名、三年生四名、二年生一名、大学院生二名

③ 活動報告

インド大乘仏教の重要教理の一つである唯識思想の基礎的原文の講読を通じてテキスト批判・文献取り扱ひの基本を養成し、今後の卒論研究の基盤を作ることを目的としたゼミナー。今年度は四世紀ごろにヴァスバンドウ(Vasubandhu)、『世親』が著わした唯識思想の代表的な論書・二十の韻文からなる『唯識二十論』を取り上げた。上級生から下級生まで一回に二人ほどがサンスクリット原文を担当する輪番制。担当が回つてきた週はローマ字テキストとレジュメ翻訳のコピーを授業前に配付して、まずテキストを正確に読むことにごろがけ、それに続いて「夢と現実の違い」・「地獄の住人」・「インドのアトミズム(原子論)」などのテーマを決めて全員で思想内容のデイスカッションをした。

夏の合宿は九月五日・六日に山中湖ゼミナーハウスで一泊二日をかけて四年生による卒論「二十二根(インドリヤ)と悟り」・

「相の持つ意味―『中辺分別論』研究」―「仏教の時間論」―「止観とは？」―「密教の修行体系」などの経過報告と三年生を中心とした「ヴァスバンドウ二人説は是か非か？」をめぐる討論会。特にこの「二人説」の全員参加の討論は、準備も良くて大変に盛り上がり、「ウイーン」の学者にも負けないで川崎ゼミで将来独自の研究報告書を作成しようよ！」などの声も出るくらい。夜の飲み会に続いて、帰りのバス内では、順番に先生の隣に坐って進路相談や人生談義の花が咲いた。

気合いを入れたコンパの楽しくうち解けた雰囲気とともに毎回の授業のサンスクリット原典の読解実力養成の鞭はかなり厳しかった。

平成十五年度開講科目

Ⅰ部▽

朝霞開講科目

インド宗教史

仏教学概論（仏教とは何か）

ヒンドゥー教概説

インド仏教史

中国仏教史

日本仏教史

サンスクリット文献講読①・②

インド古典講読（Bhāṣya 作 Svapnavāsavadattam をよむ）

インド哲学仏教学演習①

インド哲学仏教学演習②（ヒンドゥー教思想入門）

白山開講科目

アビゲルマ哲学

インド古典哲学

卒業論文（制作）

Ⅱ部▽

インド宗教史

菅沼 晃

森 章司

橋本泰元

渡辺章悟

伊吹 敦

竹村牧男

沼田 一郎

菅沼 晃

竹村牧男

橋本泰元

森 祖道

宮本久義

菅沼 晃

仏教学概論（仏教とは何か）

アビダルマ哲学（「阿毘達磨俱舍論」講義）

ヒンドゥー教概説

インド仏教史

中国仏教史

日本仏教史

インド古典哲学

日本思想史（外来思想の受容と変容）

東洋思想

サンスクリット文献講読（古典サンスクリット初級文法）

インド古典講読（テキストを熟読してインドを味わう）

卒業論文（制作）

△相互乗入れ科目▽

宗教学概論

比較宗教学（「意識」とは何か？―比較思想的試論）

インド現代思想

インド文学（印度伝奇物語『屍鬼二十五話』講読）

インド・仏教図像学（インド・チベット密教図像学入門）

インド文化論Ⅰ（インドのカーースト社会と文化）

森 章司

森 章司

橋本泰元

渡辺章悟

伊吹 敦

竹村牧男

沼田一郎

三澤勝己

伊吹 敦

渡邊郁子

渡邊郁子

渡邊郁子

川崎信定

司馬春英

宮本久義

島田茂樹

島田茂樹

島田茂樹

沼田一郎

沼田一郎

島田茂樹

沼田一郎

インド文化論Ⅱ（インドの歴史と文化）

仏教文化論（チベット仏教思想と実践入門）

仏教思想論Ⅰ

仏教思想論Ⅱ

ヨーガとその思想（ヨーガの実践をとおして）

浄土教の思想と文化（ブツダから、親鸞へ）

密教の思想と文化

禅の思想と文化

法華経の思想と文化

華嚴経の思想と文化（八十卷華嚴経の現代日本語訳と漢訳）

原文研究

パーリ文献講読

仏教梵語講読

ヒンディー文献講読

チベット文献講読

仏教漢文講読

外国語文献講読

欧文仏典講読

仏教と社会（専任教員と外部講師のりレー連続講義）

インド哲学仏教学演習①（インド古代社会研究の諸問題）

インド哲学仏教学演習②（インド思想の人間観）

インド哲学仏教学演習③（中世ヒンドゥー教思想研究）

石川 寛

高松薫直

渡辺章悟

川崎信定

番場裕之

本多静芳

眞繁弘宗

伊吹 敦

金子芳夫

漢訳

小島岱山

石上和敬

佐久間秀範

橋本泰元

川崎信定

橘川智昭

岩井昌悟

吉田 収

川崎信定

沼田一郎

沼田一郎

菅沼 晃

橋本泰元

学・仏教学の諸問題)

菅沼 晃

インド哲学仏教学演習④ (大乘仏教の研究)

渡辺章悟

インド哲学特殊研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅱ

橋本泰元

インド哲学仏教学演習⑤ (原始仏教研究)

森 章司

仏教学特殊研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ (律蔵の比較研究)

森 章司

インド哲学仏教学演習⑥ (禅思想研究)

伊吹 敦

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ (仏教と他派との思
想交流)

森 章司

インド哲学仏教学演習⑦ (鎌倉仏教の人間観)

竹村牧男

仏教学特殊研究Ⅲ

川崎信定

インド哲学仏教学演習⑧

川崎信定

仏教学特殊研究Ⅳ

川崎信定

仏教学研究指導Ⅲ

小島岱山
竹村牧男

△大学院▽

博士前期課程

平成十五年年度卒業論文

サンスクリット文献研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ (古典
サンスクリット文法における Samāsa 理論の研究) 菅沼 晃

インド哲学研究Ⅱ・インド哲学研究指導Ⅲ (中世インド思
想の研究) 橋本泰元

△Ⅰ部▽

初期仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ (律蔵による積尊教団
形成過程の研究) 森 章司

初期仏教研究Ⅱ

森 章司

三上 修平 我が国における弥勒信仰の隆盛と衰退

大乘仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅱ

川崎信定

角屋 潔 日本人の宗教観―寛容と変化

大乘仏教研究Ⅱ

渡辺章悟

蝦名 由紀 阿蘭若について

大乗仏教研究Ⅲ (『瑜伽師地論』を読む)

横山紘一

山本 敦子 『Varavahi』の製作

日本仏教研究Ⅰ・仏教学研究指導Ⅲ

竹村牧男

武子 真幸 『サテイ』の発祥と『ラーマヤナ』―人は微笑
みながら死ぬことができるか

博士後期課程

佐藤 幸寿

三浦 路代 *Hindu Goddesses, 3, Parvati* の翻訳

インド哲学特殊研究Ⅰ・インド哲学研究指導Ⅰ (インド哲

高畑 智彰

高畑 智彰 オーロピンドの思想と現代におけるオーロヴィルの
役割

王の法の特徴

アシヨールカ

アシヨールカ王の政治と法 (dharma) ―アシヨールカ

王の法の特徴

アシヨールカ

アシヨールカ王の政治と法 (dharma) ―アシヨールカ

中島 一生 古代インドに於ける崇拜対象の研究―ガンダーラ仏について

辻 健太郎 現代社会における信仰のあり方―宗教の新しい転換期を迎えて

井出理恵子 『喫茶養生記』に関する一考察―喫茶と禪の結びつき

高山 祐子 禪と茶―久松真一の禅観・茶道観を通して
小出 英生 「即身成仏」を目指す真言行者における「三密行」の重要性

小川 真弘 『中辺分別論』における人無相方便相の一考察

鹿野 美緒 LOKAMANYA TILAK

後藤 俊二 インド音楽におけるタゴール音楽の意義

根岸 佑樹 『ギター』におけるジュニヤーナ・ヨーガとカルマ・ヨーガについて―原典・註釈書の翻訳による

考察及び比較

畑尾麻由実 Mohandas Karamchand Gandhi と Bhimrao

Ranjit Ambedkar における不可触民制をめぐる相違と対立

守屋 哲治 井上田了の真怪論―本質論的な妖怪学を指して

横井 雅司 シヤクンタラー（演劇）の魅力

羽鳥 峻 ラーマーヤナにおける忍耐の重要性とそれに対する

欲求の葛藤

布川理恵子 アーユルヴェーダの可能性―アーユルヴェーダの治

療について

滝澤 史彰 現代のヨーガー―ヨーガとスポーツ

近藤 幸 『往生要集』における源信の念仏―観想念仏と称名念仏について

清水 政寿 『秘蔵宝鑰』にみる空海の間人観
小長谷将人 「マントラ」の翻訳

湯山 敦子 日本唯識における四分義の研究
平井 晶子 GLASS BEADS IN INDIA―とんぼ玉と装身具

金原 綾子 A・J・アルストン 『ミラー・パーイーの帰依の詩』の導入部分と注釈の翻訳

田中 豪 『現成公案』巻にみられる思想的特徴
坂谷 知人 アーユルヴェーダにおける肥満―古代インド医学における心身観

小柳 和央 『立正安国論』に見る日蓮の排他的宗教観

山田 裕一 シヴァの神妃―彼女を通して見る、女神の偉大さ

小澤 未央 ターミナルケアと宗教―真のケアを求めて

渡邊 民 Wat Chet Yot にみられるインド仏教と美術について

末永 忠之 『理趣経』にみる空観に基づいた絶対肯定の思想―

大楽の法門を中心として

後藤裕一郎 正しい認識と誤った認識―ニヤーマ学派の思想

飯田 洋行 ハリジャン文化―異端についての再考

戸次 顕彰 大乘戒経の説く戒条と受戒作法について

櫻井 宣明 『俱舍論』根品にみられる生命観

山戸ちひろ 金剛界曼荼羅の思想—真理の世界と現象世界の境界

△Ⅱ部▽

大平 哲弘 上杉謙信の毘沙門天信仰—妙高山観音信仰を起源として

下田健太郎 『餓鬼事経』(Pavathu)において餓鬼(Peta)にみられる業報思想の研究

越智 康幸 「心」とは—サーンキヤ・ヨーガ思想と現代臨床心理学における心象観

小谷 一洋 ヒンドゥー寺院の平面設計 *Manusara* 第三十二章翻訳

清水甲太郎 イギリスのインド支配時代のヒンドゥー教について—西洋との遭遇

師井 武彦 如来蔵思想—仏性の考察
橋本 崇史 インド社会における婚資金制度と女性問題

松山 直弘 古典サンスクリット文学における〈恋〉の世界—文藝論 *Sahityadarpana* を中心とした一試論

安田 舞 *Jayadeva* の *Radhā* 観
日下 石緑 『観心本尊抄』における日蓮聖人の即身成仏について

黒川 伸久 妙好人浅原才市の研究

澤田 容子 両性具有—インドにおける両性具有の存在意義

前田 尚輝 瑜伽行唯識学派の「ことば」と修道

元木 裕 『遠羅天釜統集』の考察
高野 史 インドの食—ヴェーダ文献と現在について

三ツ谷義久 『解深密経』—「無自性品」に見る中観理解
金丸 春樹 仏教的時間—ダルマキールティの認識論としての利

増田 孝夫 那滅
唯識思想におけるア—ラヤ識と依他起の関係—『撰

田中 稔 大乘論』第1章、第2章を中心として
インド・パキスタンの対立—両国間の歴史からの考

察

大学院修士論文

堀井 晶子 摩利支天の研究—*Sāhjanamālā* を中心に

伊東 昌彦 『無量壽義疏』の研究
林 香奈 懐感『釈浄土群疑論』の仏身仏土論

東洋学論叢 第29号

(東洋大学文学部紀要 印度哲学科篇 第57集)

平成十六年三月三十日 印刷

平成十六年三月三十日 発行 [非売品]

発行所 東洋大学文学部

東京都文京区白山五―二八―二〇

電話 印度哲学科 (三九四五) 七三三

印刷 ヨシダ印刷株式会社

東京都墨田区亀沢三―二〇―一四

電話 〇三―三六二六―一三〇一

BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters

Toyo University

NO. 57

March, 2004

Series of

INDIAN PHILOSOPHY

XXIX

CONTENTS

- IBUKI, Atsushi : The Thoughts of *Fā-jū-jīng* and its Historical Significance
..... (1)
- NUMATA Ichiro : *Manusmṛti* VIII, IX and Rājadharmā Section (1) (99)
- HASHIMOTO, Taigen : A Japanese Translation of the Section *Vipramatīśī*
in the Kabīr's Bījak (105)
- SHIMIZU, Tadashi : Definitions of Poetry According to the
Saṃskṛt Critics in India (124)
-

Published by

TOYO UNIVERSITY

Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo